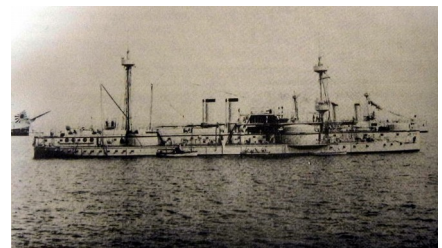
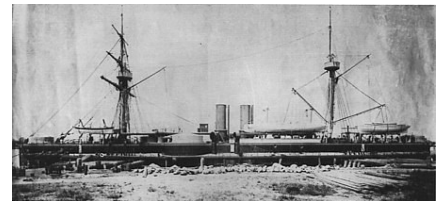


大阪から九州方面へJRで行かれますと山陽本線ですが。ところがあの山陽本線は、ほとんど海岸部を通っていないということに、お気づきでしょうか。もし、あれ海岸部を通っておれば、あの美しい瀬戸内海を、たえず左手でしょうか、帰る時は右手ですが見て行けるのですが。ですが、ほとんど海が見えないことをお気づきでしょうか。

実はこれはなぜかと言いますと日清戦争。当時は中国を「清い国」と書いて清国しんこくと言いましたが。その清国の「定遠（定まると遠い、ていえん）」という軍艦、もう一つ「鎮遠（ちんえん）（鎮めると遠い）」という軍艦があったのですが、当時は定遠（写真上）・鎮遠（写真下）という最高級の軍艦だったようですが、それが瀬戸内海に入って来て攻撃されたなら、海岸部を走っていると艦砲射撃ですたずたになる。だから、それを避けるために、遠ざける形で、海岸部を避けて走らせた。こういう話を聞きました。大阪の交通博物館で確認しましたが、大体そのようです。東海道本線もそのようです。この話が記録にいろいろのっています。ということで、どうもまちがいないようです。おそらく皆さんは、今日の話聞くまでは思いも寄らなかった人が大部分ではないでしょうか。



なんで、こんな話を持ち出したかと言いますと、じつは天皇陵と言いますが、奈良県から大阪府にかけてあります。皆さんもよくご存知だとおもいますが。これが実は、本当の目的、お墓ともう一つの目的、実はこれは（古代の）軍事要塞であった。つまり砦(とりで)として作られていたという[仮説]を述べさせていただきます。



皆さんは、なぜ？。そんな馬鹿なことがあるか。初めて聞いた方は、とうぜん、そう思われるとおもいます。ところが証拠として、大阪府の高槻市。そこに今城塚(いましろづか)古墳（左の写真）という有名な古墳がございます。これは天皇陵、ほんとうは継体の墓だという説があるぐらいですが、墳丘のはばの長さが一九〇メートル、全体の長さが三五〇メートルという雄大な巨大古墳なのです。

これを教育委員会が調査したところ、近世織田信長の時代だと言われる砦のあとが頂上はもちろん、二重の濠(ほり)、周濠(しゅうごう)と言いますが、その埋められたどるい内側の濠(ほり)に土塁を高く築いたあとが、はっきり出てきております。

これは近世、信長の時代には、鉄砲が出てきておりますから、鉄砲をふせぐためには、土塁を高く築かなければ防げない。ですから継ぎ足しといいますか補強作業をしたものと思われます。ほかにも近世に天皇陵が砦(とりで)として使われたという痕跡(こんせき)は、考古学者の方にとっては、めずらしい話ではないです。

これに対し、話としては聞いていて知ってはいましたが、そんなお墓として祭られたものを、砦(とりで)として使うのは、けしからん。無惨(むざん)だ。そういう感覚で今まで居りましたが。それでは、果たしてそうだろうか。つまり近世の戦争のプロと言っている軍事集団の信長などにとっては、屈強の砦と見えていたわけです。と言うことは、同じく弥生時代や古墳時代にも、そのように砦と見えたのではないか、ということです。

それでは造られた当初から軍事的な要塞。もちろん、これはいつも軍事的な要塞であったというわけではありません。敵が攻めてきて交戦状態になった場合。その時には、砦(とりで)として機能する。それがあの巨大古墳を造るばあいの大きな目標になっていたのではないか。そう考えてきたわけです。



一番最初からの巨大古墳をご存じでしょうか。これは実は食するときの箸(はし)と書いて「箸墓」(左の写真)とよばれる墓が奈良県にあります。奈良県に有名な三輪山という山がありますが、その山のふもとと言っている場所です。この箸墓(はしはか)は長さが二五六メートル大きいですね。方円墳、一般には前方後円墳と言われますが、これがいきなりと言ってよく。造られます。この前は二〇〇メートル、その前は一五〇メートルという、段階を踏んでいない。いきなりパッと、大きい古墳が出現したと、考古学者は言っています。

これについては、岡山大学教授の(近藤義郎という)方の有名な論文がありまして、それで、そのことは明確に分かっているのですが。それでは、じゃあ、なぜ、急に、いきなり、そんな大きい物を造らなければならなかったのか。その説明が十分についていなかったわけです。それに対して考えましたのは。この墓に祭られているのは、倭迹々日百襲姫命(やまとととびももそひめ)」と言いまして、言いにくいですが「と」を三回言わなければならない。の読みは、また異論がありまして、今は申しませんが、ふつうに言われているのは倭迹々日百襲姫命が祭られていると『日本書紀』に書かれています。しかし考えてみると、この巨大な古墳を造ったのは倭迹々日百襲姫命ではないですね。

作られたのは、崇神天皇の時代と日本書紀にあります。業績について、『古事記』は三道(将軍)『日本書紀』は四道(将軍)を拓いたと書いてあります。これをわたしは、『古事記』が本来であると考えます。それを『日本書紀』は、さらに一つプラスして、崇神天皇を立派にえがいた。逆はあり得ないですね。『古事記』も『日本書紀』も天皇家の中で作られていますから。ほんらいは四道であるものを『古事記』が、これはよけいだとひとつ除いて三道にするということも、ちょっとありえない。時間的にも『日本書紀』よ

り『古事記』が先にできています。ですから『古事記』の三道がほんらいである。わたしはそう考えています。『日本書紀』は、話を大きくしたわけです。

それで、そのように考えてみますと、崇神天皇のとき、大和盆地以外に新しい領土が、かなり広大に、支配下に入ったということは明らかなのです。そうしますと、今のような巨大な古墳を造るのには、たくさんの人数、労働人口がいるわけで、従来大和盆地のなかの人だけで造っていた段階では、初代神武から九代開化までは、そんなに大きい古墳はない。ところが、いきなりパッと、一〇代崇神の段階で、いきなり大きい古墳ができたというのは、それに労働人口というか、集める労働人口が格段にふえたと考えられます。

そういう巨大な労働人口をバックにして、あのような巨大な古墳を造りえた。こう考えるのが話としては、わたしは、非常に分かりやすい話であると思います。



大和盆地内がひとつ、こんどは大和盆地外が第二。その二つの領域をあわせて、その労働人口をつかって築いた。こう考えるわけですね。それはよいのですが、それじゃあ、何のために、そんな巨大古墳を造らなければならなかったかということが、主題に関連しているわけです。

それで実は、征服された方は銅鐸圈（天孫降臨で征服された出雲から近畿へ脱出した人々の子孫）である。征服した方（九州王朝の一分派である神武の子孫）は、九州伝来の三種の神器を宝とする天皇家である。ところが征服された方は、銅鐸をお祭りの道具とする銅鐸圈です。これは、じつは西は中国地方から東は東海地方まで広がっていた。その中に征服を受けた。それで征服をうけたほうも喜んで征服される人はいませんから。たいへんに脅威を感じ、反発を感じたことはとうぜんなのです。その脅威を感じ、反発を感じた人たち、銅鐸圈の中心はどこか。それはじつは、大阪府の茨木市なのです。

東奈良(ひがしなら)遺跡。奈良県の「奈良」に「東」を付けて東奈良遺跡とよびます。しかし大阪府のなかにあります。そこから質・量ともに最大の銅鐸の鋳型（写真）が、日本列島中抜群に出てきたのが茨木市東奈良遺跡なのです。

この地帯が鐸圈の中心だったのです。この中心地が、先ほど言いました『古事記』で西のほうが抜けているということは、ここは支配下に入っていなかったということです。てきですから銅鐸圈のほうは、崇神天皇たちにたいして反撃の敵愾心をもっていたはずです。そうしますと崇神天皇の根拠地はどこか。



解説：東奈良遺跡には、二重の環濠の内部に高床倉庫など大型建物や多数の住居があり、外部には広大な墓域もあった。発見された工房跡から、銅鐸の鋳型が35点も出土しており、ほかにも銅戈・勾玉などの鋳型が発掘されている。ここの鋳型で生産された銅鐸が、近畿一円から四国でも発見されている。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

これは奈良県桜井市という奈良県の大和盆地の端の方。飛鳥とならんで端のほうの桜井市に、崇神天皇の本拠地水垣宮があったと言われています。「師木の水垣宮」と、『古事記』に書かれております。『日本書紀』にも、にたような記事が書かれております。その桜井市の本拠地のほうに対して、茨木市のほうから攻め込もうとすると、古代ですから木津川を遡るより他にない。ちょうど今の京都から奈良へ行く近鉄（京都線）ですね。これのある木津川を遡るより以外にない。そして大和盆地にはいって、まもなく箸墓にぶつかるわけです。そのうしろに桜井市があります。

ですから桜井市に攻め込むには、途中で箸墓があります。そこに軍事拠点。あの高いところに見張台や指導部がおかれて。もちろん兵士は平地にいます。彼らが迎え撃つ。入ってくるほうは平地にいます。そういう敵に対して、高い土地をバックにもって戦うほうと、平地だけで戦うほうでは、戦略的に、戦術的に、どちらが有利・不利かははっきりしています。遠くから来る敵が、ずいぶんよく見えたということですね。

遠くから来る敵がよく見えるということです。矢も上から下を撃つほうが、下から上を撃つより、もっと効果的に撃てたと思うわけです。それに何よりも敵の動きをはっきりキャッチできます。知らないうちに、敵に後ろに回られていたということもないわけです。このように、いわゆる 有事のときには、軍事的に重要な意味を持つ。そういうことが、大きな墓を造ったことのひとつの、背景であったのではないか。

トルストイが言いますように、死んだら人間どのぐらいの土地が必要かという有名な小説がありますが、二メートルあればよい。今の日本のように焼き場で、骨に焼いたら一メートルもいらないうちにも知れませんが。しかしそれ以上に、大きなものを造るのには理由があった。一方ではお祭り、それと同時に、もう一方では軍事的な目的があったのではないか。このように考えてきたわけです。

それで一方では、次の十一代の垂仁(すいにん)天皇の時、たいへんな事件が起こるわけです。これは『古事記』・『日本書紀』ともに、書いてあります。それは沙本毘古(さほひこ)という人がいました。この佐保は、奈良県の佐保、あそこだと言っていますが、そうではないと考えていまして、やはり茨木市・摂津市にも「佐保」や佐保川がある。そこにも佐保がある。「佐保」というのは、この摂津の佐保だと考えています。

その支配者の沙本毘古(さほひこ)という人に、沙本比賣(さほひめ)という妹がいました。それが、垂仁天皇のお妃になった。それが新婚まもないころでしょうが、垂仁天皇が昼寝をしていた。じつは沙本比賣には、かくれた目的があった。それは兄さんから、新婦として入って行って、小さな刀(小刀)を渡すから、これを持って行って、これで新郎の首を刺し殺せ。そういう依頼をうけてきた。新婦が暗殺者である、そういうすごい話ですね。

それで首尾よくというか、新郎の垂仁天皇が昼寝をしていた。今こそチャンスだと思って、小刀をだして首に振りかざした。ところが、じつに平和そうな顔をして寝ている新郎

の顔を見て、あまりにも悲しくて、涙がぽたぽたと落ちた。その涙が、垂仁天皇の顔に落ちた。そうしますと垂仁天皇が、ふっと目を覚ました。今夢を見ていた。佐保のほうから黒い雲が押し寄せてくると思ったら、雨が降ってきた。そう思って目を覚ましたら、（あれは）何のことだと思っていた。じつに、のどかな顔で言った。ついに沙本比賣はたまらなくなって、実はわたしは、とんでもないことを兄から言いつかって来た女です、と告白した。

それで垂仁は、ひじょうに怒って大軍を発して、佐保城をとり囲んだ。そうしますと不思議なことと言うか、沙本比賣はお兄さんのところに。城にこもってしまった。

そうして永年囲んだあとに、火を放って落城するときに沙本比賣は使いを送ってきた。「じつは、わたしは子供を生んだ。それは、あなたの子供である。それを信じてくれるなら、その子供だけを助けたい。」そう言って、その子供を引き渡した。そういう話が載っている。そう言って沙本比賣と沙本毘古は、燃えさかる落城の中で死んでいった。



ちょっとギリシャ神話にもないような、新婦が暗殺者であるという事です。これが、じつは銅鐸圏滅亡の話である。銅鐸圏の中心地が落城した。ということは、つまり西は中国地方から東は東海地方まで。かつてあった銅鐸圏だったものが全部天皇家の支配に入った。そういう事件を意味している。ひじょうに大きな戦いだった。それがクローズアップされたということなのです。

ひじょうにこれは重要な歴史事実だと考えています。そういうことが背景になって初めて、次にもうします応神陵（写真上）・仁徳陵（写真下）というわが国最大の、いや世界的にも最大クラスの古墳が築かれる背景は、今の事件にあった。このように思っています。



いわゆる応神陵・仁徳陵というのは、たいへん大きな古墳で、仁徳陵は長さが四八六メートル、世界最大と言ってもよい。と言いますのは、秦の始皇帝陵とは比べかたによります。秦の始皇帝陵は東西三四五メートル。ですから仁徳陵よりだいぶ小さいです。ただし始皇帝陵のほうはほぼ正方形に近いので、南北も三五〇メートルあり、面積は秦の始皇帝陵のほうが仁徳陵より大きい。しかし目で見たところは、仁徳陵のほうが一四〇メートル以上大きいのですから、仁徳陵のほうが大きいとも言える。見方によって秦の始皇帝陵と仁徳陵、どちらが大きいかという感じなのです。

同じく応神陵も、長さは仁徳陵よりやや短いですが、ところが面積のほうが仁徳陵より応神陵のほうが大きいのです。

ですから応神陵・仁徳陵どちらが大きい。見方によって、どちらとも言えるような。そういう世界的に巨大な墳墓であることは、間違いがない。ですから天皇陵というのは、応

神陵・履中陵などの大きな二つだけでなく、これに準ずるものが、やたらにある。それでは、これらは何であるのか。

よく言われるのは、四世紀の後半から五世紀前半という、応神から仁徳の時代にかけて、朝鮮半島で高句麗と倭軍の激戦の真っ最中であった。それは高句麗好太王碑（右の写真）という、四一四年、五世紀のはじめにできた石碑にはっきり書かれておりますので疑いのないところです。それに対して、従来のほとんどの学者は、それを見ても朝鮮半島で高句麗と戦ったのは近畿天皇家である。そのように思ったり、書かれたりしている本がひじょうに多いと思います。



しかしそれは逆だと考えます。それは、むしろ近畿天皇家が主勢力でなかった証拠である。なぜかと言いますといまの好太王碑のところに墓がありまして大王陵。人によりましては、近所に將軍塚というのがありまして、そちらのほうだという人がいますが。どちらにしましても一〇〇メートル前後、まあ日本でいえば中型古墳。中の中程度のお墓なのです。ということは高句麗の人は、王様のお墓を造って祭るのに熱心でなかったから、そんな程度のもので終わったのか。そんなことは、ないと思います。なんとならば好太王碑に書いてありますように、いまや倭軍と激戦の真っ最中です。あの好太王碑を建てたから、あとは激戦は終わったのか。そんな話ではない。そうすると交戦中でありながら、そんな巨大古墳を造る余力はない。戦う兵士も、古墳を造るのも同じ人間ですから。

そうしますと、やはり交戦中の高句麗としては、まさに一〇〇メートル前後というのが適正規模ということが、言えると思います。いや、そんなことはない。日本人には超能力があるのだから、かたほうで高句麗と戦って、かたほうでは、あのような世界最高レベルの天皇陵を次々と古墳を造る力量があったのだ。そういうことをいう人がいたら、そんなふしぎな話は信用できないと思います。

なぜなら、日本人が非常に劣(おと)った人間だとは思いますが、どうじにまた超能力をもった凄(すご)い人間だとも思いません。

そうすると九州・一貴山銚子塚古墳(いきさんちょうしづかこふん)というのが筑前二丈町にあります。さらに筑後川流域の、有名な装飾古墳。さらには有名な石人・石馬の古墳。これらはいずれも一〇〇メートル前後の中型古墳です。巨大古墳はない。ということは、いずれも朝鮮半島で高句麗と激突している倭軍、倭王の中心勢力にふさわしい規模である、ということができる。これに対して近畿の場合は、同じ三種の神器を奉じる事をよしとする勢力である。これは、イギリスに対するアメリカ合衆国の関係で、イギリスが本家・本元で、アメリカ合衆国はそこから分派して本国よりも大きくなった。あのイギリスとアメリカ合衆国の関係に、よく似ている。そういう存在が近畿天皇家である。



そうしてくると近畿天皇家は応援勢力ではあったでしょうが、主勢力ではなかった。朝鮮半島で戦う上では。しかし、そうは言っても高句麗が九州に攻め込む。これは博多湾岸に攻め込んだことを、おそれて筑後に下がったわけです。さらに関門海峡を越えて大阪湾に突入してくる可能性がある。そうすると応神陵というのは、羽曳野市の古市古墳群（写真上）といいまして大和川が大和盆地にはいる入口になっています。天皇家の一番最後の根拠地が大和盆地です。

大和盆地は、まわりが、まさに山に囲まれた天然の万里の長城のようなものです。山に囲まれている。そこに侵入しようと思えば、今の（大阪府）羽曳野市のところ、大和川のところを、通って侵入してくるわけです。そこに応神陵を造っている。



ついで堺市の百(も)舌(ず)古墳群（写真下）、高石市の海岸に上陸してきたときに仁徳陵を中心にする百舌古墳群が控えている。そして、いまの古市のほうへ行こうとすればバックからこれを攻撃する。この二つの巨大古墳は、屈強の砦(とりで)として向え撃つ。いずれも、そのような軍事的砦(とりで)という性格をもって造られたのでないか。昔は砦(とりで)としての状態だった。

今ほど人間が多くないのに、あれだけ大きな砦があったのなら。ものすごかったですね。ものすごく敵の侵入をおそれてというか、恐怖というか、これに対応する。

はじめに言いました。（明治時代）山陽本線を作るときも、東海道本線を作るときも、敵がどう攻めてくるかをいつも気にしている。それに対する軍事的補給路を兼ねてつくったわけです。同じように古墳を作るとき、ただ平和的に、お祭りしかしません。そうではなく一方はお祭りですが、他方はなにかあったばあいの軍事的よりどころ、というかたちで造られた。

今の大和盆地は、大和盆地全体が大自然がつくった天然の万里の長城のような屈強の場所なのですが、その中でも飛鳥という場所は、有名な大和三山という山がある。畝(うねび) 傍・耳成(みみなし)・香具(かぐ) 山とあります。あの山はまた天然の、見張り兵がいたり指揮集団が居たりするのには屈強の場所だった。あそこに囲まれているから、飛鳥と

いうところは、例えて言えば「万里の長城の中の千里の長城」のような、二重装置の軍事的にひじょうに守りやすい場所です。

現代のわたしたちは、そんなことを思いながら行く人はいませんが。それは平和な時代になったからであって、いわゆる軍事集団として発生した、熊野を通して入ってきたというのですが。そういう天皇家の勢力にとっては、飛鳥は屈強の根拠地だった。それをとりかこむ大和盆地。さらに、そこに瀬戸内海に入って上陸してきたときの砦。そういうものが応神陵であり、仁徳陵。それをとりまく古墳群であった。

それは、今よりも昔の方が、戦争とか侵略とか、島国であるがために、ひじょうにそのようなことに備えていて、智恵を出しあっていろいろなことを考えて造ったということと言えるかもしれません。

とくに敗戦後の日本は平和な時代に入ったために、そういう目で見ると忘れてしまったところがありまして。関西の人は、（たとえば京都に比べると）東京に、はじめて車で行った人は、本当にびっくりされると思います。ホントに道がまがりくねって、分かりにくい。皇居のほうに行くつもりなのが、違うところに行ってしまった。変な風に道がずれている。これは道路の作り方が間違っているのではなくて、江戸時代に江戸城に敵が攻めてきたときに、まっすぐに入られないように、道をワザと変なところにグルグルまげてしまった。それを現在も受け継いでいるから、東京というのは京都と違い、ひじょうに変に曲がりくねっている。そういう軍事道路をいま使って、平和に車で走っている。

現代の目で見ると、ほんとうに歴史としての古代の姿が見失なわれてしまうという問題であろうと思います。

なお付け加えますと、天皇陵、たとえば履中陵などが百舌古墳群にあります。これの陪塚から、ものすごい数の武器が、鎧・兜や剣がおびただしく出土しました。そしてまた大和盆地の中でも、メスリ山古墳などからは方部の下から、何百人分の鉄器・武器が出土しました。

（そういう）有名な話があるわけです。かなり天皇陵や古墳の中や周辺から武器が出土することがひじょうに多い。まあ一番、はっきりしていることは、あの中に葬られた御当人は、たいてい剣(つるぎ)をもっています。勾玉や鏡は、あったりなかったりしますが、女性とは別にして、剣(つるぎ)をもっていない人は、ほとんどいない。死んでも、なおも武装しているという姿をしめしています。

それを中心にしているのですから、その古墳がまったく軍事を無視した古墳であるはずがない。そのように言えばいえます。古代には、わたしたちが思っているよりも、もっと、頻繁(ひんぱん)に戦争というものが、あった。

それは、いつも恐怖に。縄文時代やそれ以前には、動物との戦いにあけくれたでしょうが。一番その恐怖は寝ていても、いつも頭にあったでしょうが。人間がけっきょく他の動物とのたたかいに勝って、弓矢、武器の力により人間が勝ったあとは、今度は人間同士の戦いが、いつも頭から離れなくなったと思います。

それでは、さいごに興味深い問題を付け加えさせていただきます。

三角縁神獣鏡、銅の鏡ですがいつも古代史で問題になります。ところが、あれについて、なぜか従来の学者・研究者や教育の場でも、ほとんど問題にされていない重大なテーマがあります。

銅鏡の軍事的意義、こういう問題です。

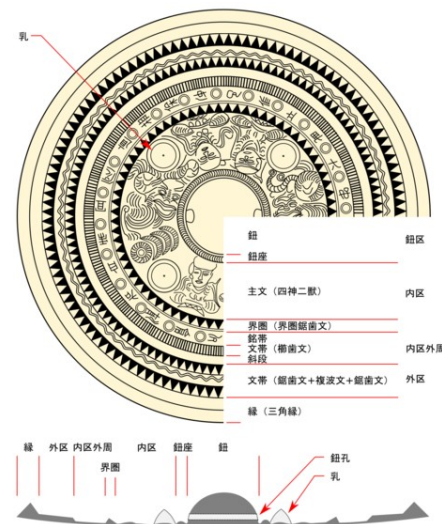
それが軍事的な重大な意義を、持っています。みなさん誰もが、天皇陵が軍事基地だと言うだけでも、だいぶまゆつばだと思っておられたのに。あの鏡が軍事的意義があるとは、とんでもない事を云うと思われるかもしれません。が

『三国志魏志倭人伝』の中に、魏の明帝の詔(しょうちよく) 勅が、長い文章が載っています。その中に一〇〇枚の鏡、これを与えると書いたあとで、これを国の人たちに見せて、わたしが、つまり中国の天子が、倭国の女王卑弥呼(ひみか)をひじょうに愛し、いつくしんでいる。そういうことを知らせなさい。これは『魏志倭人伝』を読んでいる人は、みんなよく知っている文章です。ところがよく考えてみますと、美術品として、よい美術品だから見て楽しみなさい。博物館にでも入れなさい。そういう意味ではありません。

そうすると、今言った言葉を考えてみますと、もし卑弥呼を攻撃する人間がでてきたら、それは卑弥呼をいつくしみ愛しているわたくし魏の、中国の天子を攻撃するものと心得よ。そういう意味を、あの魏の詔勅はもっていると思います。もし、その覚悟がなければ、うっかり倭国の女王を攻めることはできない。

つまり、外交上の全安保障です。卑弥呼が、骨董好きの女性だったというような見方は間違っていますし。卑弥呼が、お化粧好きで、鏡を集めてお化粧していた。そういうような考え方も、ぜんぜんダメです。

そういう意味で、さらに考えますと前漢式鏡・後漢式鏡は中国に当然あります。その前漢式鏡・後漢式鏡は、糸島博多湾岸を中心に出てきますが。それらは軍事的意味をもっている。それを持っている王者を攻撃することは、中国を攻撃をするという意味を持つ。そういう軍事的意味をもったものである。こんどは、それに対して三角縁神獣鏡というものは中国にはありません。そっくり同じものはない。だから今度は、今の考えに準ずることで。三角縁神獣鏡というものは日本側で作ったと考えています。その場合は、やはり前漢式鏡・後漢式鏡のそっくりさんを日本側で作ったら、作る場合は中国側の了承がいると思います。ところが了承なしに作った場



合は、鏡としては似ていても違う鏡。三角の縁(ふち)が付いたり、なかのデザインが違います。似ていても違う鏡を作らせていただきました。そういう意味が三角縁神獣鏡です。ただし鏡の性質は共通していますので、この鏡の原産地は中国ですから、われわれは中国に協力する体制にいる。そういう証拠品が三角縁神獣鏡だと考えています。

ですから、やはり三角縁神獣鏡を持っているものを攻撃しようとする場合は、やはり後ろにいる中国といつ戦っても、やむを得ない。そういう覚悟がなければ攻撃できなかったはずで、そういう意義を三角縁神獣鏡も、中国の鏡に準ずる価値を持っていたと考えます。

『魏志倭人伝』を読めばとうぜんのことなのですが、なぜか、そういうことに触れたものをあまり見ませんので、「天皇陵の軍事的意味」に、「銅鏡の軍事的意味」という問題をプラスさせていただきました。

終わり

解説：冊封体制又中華朝貢体系とは、中国の歴代王朝の君主たちが自任した、称号・任命書・印章などの授受を媒介として、天子と近隣の諸国・諸民族の長が取り結ぶ名目的な君臣関係を伴う、外交関係を規定する体制の一種。天子とは天命を受けて、自国一国のみならず、近隣の諸国諸民族を支配・教化する使命を帯びた君主のこと。ウィキペディア